

天大生のSDGsに関する意識調査 ①

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

私は、天理大学で環境論についての講義を20年以上にわたって担当してきた。その間、環境問題の過去・現在・未来について、「常識」として身につけておくべき「知識」や「知恵」を、私なりに学生たちへ伝えてきたつもりである。それは、「知識」ある教員から知識ない学生への一方的な“上意下達”方式だった。

ところが、双方向コミュニケーションのツールとしてSNSが普及し、どんな情報でも瞬時に入手できるようになった今日、最新情報は「知識」ある者の独占物ではなくなった。それは、学生でも素早く最新情報・関連情報を入手できるようになったことを意味する。そのことは良いことだが、真贋や是非の見極めに少々不安を抱くようになってきているのも事実である。むしろ十分に咀嚼・消化されないままの状況にあることが、これからの課題ではないかと考える。

そこで今年度の授業では、環境問題に関する講義をおこなった後、学生自らが考え、咀嚼・消化できるような小グループの学生間の討論時間を初めて取り入れた。いわゆる、アクティブラーニング法の導入である。これは、自らの「知識」を「知恵」として働かせるための訓練でもある。

その経緯を把握するため、私はこの春学期試験で、4問のうち1問を、「知恵」を推し量る設問として出題した。ほかの3問のように、ある一定の正解を求めるのではなく、小グループに分けられた学生たちによる討論内容、すなわち止揚された「知恵」を回答させる設問だった。

設問は、国連が打ち出した「SDGs (持続可能な開発目標)」に関するものだった (図1)。



図1 SDGsの17目標。朝日新聞記事(2017年6月27日)より。

「SDGs」とは何か?

2015年9月、国連は「持続可能な開発サミット」を開催し、2030年までの新たな目標である「SDGs」を全会一致で採択した。それは、17の目標(図1)と169のターゲットである。

この目標とターゲットが打ち出された背景には、2000年に国連で採択した「MDGs (ミレニアム開発目標)」の存在がある。2015年までの15年間、国際社会は協働で、途上国において生後5歳未満の乳幼児死亡者数を減少させ、多くの子どもたちを学校へ通学させられるようにした成果があったからである。一方で、貧富の格差の拡大は一層著しくなり、「MDGs」ではカバーしきれない問題が起きてきたこともその背景にあった。

今日、「SDGs」の実践は、国や地方自治体に限らず、企業や団体、個人の生き方にまで浸透し、今も拡大し続けている。国連がこれまで打ち出したアジェンダの中で、「SDGs」は最も身近に感じられる行動指針・目標になっている(表1)。

目標1 (貧困)	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。
目標2 (飢餓)	飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。
目標3 (健康)	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。
目標4 (教育)	すべての人々への包括かつ公平な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。
目標5 (ジェンダー)	ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女子のエンパワーメントを行う。
目標6 (水・衛生)	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。
目標7 (エネルギー)	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な脱炭素エネルギーへのアクセスを確保する。
目標8 (経済成長と雇用)	包括かつ持続可能な経済成長、およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用とディーセント・ワーク(適切な雇用)を促進する。
目標9 (インフラ、産業化、イノベーション)	レジリエントなインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進、およびイノベーションの拡大を図る。
目標10 (不平等)	各国内および各国間の不平等を是正する。
目標11 (持続可能な都市)	包摂的で安全かつレジリエントで持続可能な都市および人間居住を実現する。
目標12 (持続可能な生産と消費)	持続可能な生産消費形態を確保する。
目標13 (気候変動)	気候変動およびその影響を軽減するための緊急対策を講じる。
目標14 (海洋資源)	持続可能な開発のために海洋資源を保全し、持続的に利用する。
目標15 (陸上資源)	陸域生態系の保護・回復・持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の防止・防止および生物多様性の損失の防止を促進する。
目標16 (平和)	持続可能な開発のための平和と包摂的な社会の促進、すべての人々への司法へのアクセス確保、およびあらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度の構築を図る。
目標17 (実施手段)	持続可能な開発のための実施手段の強化し、グローバル・パートナーシップを活性化させる。

表1 SDGsの17目標とその内容。環境省のホームページより。

「SDGs」に関する設問と回答

私が春学期試験に出題した設問は、以下のとおりである。「天理大学として『SDGs』を実践するには、どのような方法・内容が考えられるか? 具体的な事例をあげて説明しなさい」というものだった。当然この設問に対する正解は一つではない。授業で伝えた「知識」を通して、どこまで「知恵」に変えているかを狙った設問である。これは、授業中に討論した小グループ間の考え方を整理する機会でもあった。

試験は、「地球環境論」「テーマ科目1」「自然と人間1」の統一授業のテストとして実施した。受験者数は「地球環境論」(1年生)201名、「テーマ科目1」「自然と人間1」(2~4年生)69名の計270名だった。そのうちの回答不明・無回答の7名を除外し、有効回答者数は計263名だった。

また、当方が期待していた回答は「SDGs」17目標(表1)に関連する内容・項目についてだったが、それとは別の回答、すなわち天理大学に特化した独自の「SDGs」として考えられる回答(7つの目標)が得られた。それらすべてを合わせると24目標となり、計673項目の回答となった。

得られた回答を17目標(図1、表1)にグループ分けした結果を図2に示すが、残りの7目標の結果は、次号で示す。

図示したように、17目標内にカテゴライズされた項目数が最も多かったのは、図1に示す目標12「つくる責任 つかう責任」で、103項目(回答者)数だった。

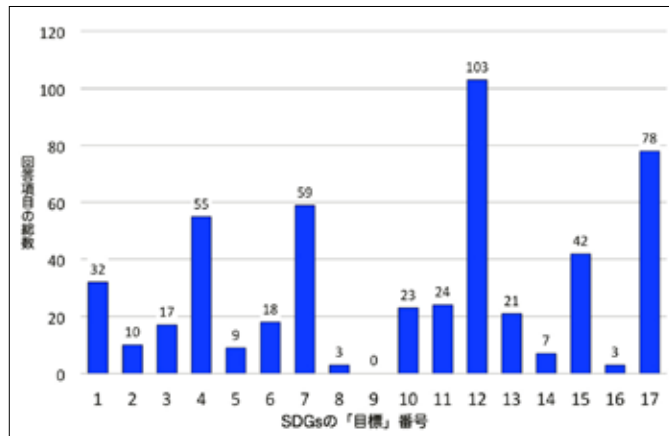


図2 SDGsの17目標別に見た回答項目数。